

DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



7 9 X 9 E 4 2



77X7EIL 2

04 **マエガチ**

05-19 **雪路時愛**

20-24 **味燐ふーか**

25 **アトガチ**

26 **奥付**

初めましてやそうでない方もこんにちわ。雪路時愛（ゆきじしあ）です。

んーちゃかむーむー同人誌第五弾目となったこの本を

お手にとって頂きありがとうございます。

前回のけいおん本『フタメタモル』の続編でございます！

でも、『フタメタモル』を読んだことがない方も、読んだことある方も
楽しめる内容なのでご安心ください♪そして今回もふたなりですw

今回のお話は、『卒業後』がテーマになっております。

そして唯あず!!（+その他の方達）

一度は描いてみたかった、たくさんのお兄ちゃん達に囲まれちゃうお話です。

味燐ふーかちゃんの小説では唯とあずにゃんのラブラブ話が読めますよ☆

表紙の絵とリンクしているところもあるのでそこに注目してくださいっ

漫画も小説も最後までお付き合い頂ければ幸いですっ。

それではお楽しみくださいませ！

2010・12月 雪路時愛



COMIC MARKET79

'n'-cyak-m-mu- presents



今日は部室へようこそ♪

まだ部員は私だけです

これから皆さんと一緒に軽音部を盛り上げていきたいと思っってます…

んー…ちよつとかたいかな？

んー…ちよつとかたいかな？



あ、にゃん♡

ふええっ、ゆ、唯先輩!!!



今日はあずにゃんのことか気になっちゃって来ちゃった♡

まあいいじゃないかあ

卒業したのに来ないでくださいつつ!!!

あれ？未だに部員はあずにゃんだけ？

は、はい…

先輩を不安がらせてしまつちや駄目だ

でも！絶対軽音部は廃部になんかさませ…

あずにゃんそんなことよりお茶しよ

ちよっ…
唯先輩っ
やめてくださーいっ

もしこんなところ
見られてもしたら
変に思われるじや
ないですか！

だつてさー
私達が軽音部の時は
よくお茶してた
じゃんかー

もうそういうのは
やめたんですっ！

ほら

…ツ

06

あの時みたい
にあずにやんのミルクで
紅茶飲みたいな…

また先輩に
私のおちんちん

ふあ…
やめてくだ…

ほら…
あずにやんの
恥ずかしい秘密…

遊ばれ…
ちやうのかな…

あ

あずにゃんちんちんは
素直だねえ

何か期待してる
のかな？



先輩の息が勃起した
おちんちんにあたって
ぞくぞくする

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡



こうやって
おちんちん
食べられるのって
久しぶりじゃない？

久しぶり…だから？
身体が敏感になってる



初めておちんちんが
生えた日から毎日のように
私達に遊んでもらってたけど

卒業してから
遊んでくれる人が
いなくなって

おちんちん
さみしかったんだよね？



そう…
本当は触って欲しかった

唯先輩に
触って欲しかった

そんなことな…





えっ?

そしてそして
今日はおいしい
こくまるミルク入りの
紅茶を作ろうと
思いまーす♪



まだまだでる...よね?
あずにゃん?

たくさんたくさん
くっさいミルクが
飛び散っちゃった

あ
あ
あ



もちろん

ミルク8割
紅茶2割の
超濃厚で♡



そんなおいしい
あずさミルク入りの
紅茶をたくさんの人に
飲んでもらいたくっ!

こちらのみなさんに
お越し頂いちゃいました!



ほらー
あずにゃん!
一人だけじゃなく
こつちもかまっつて
あげてええ

すーっごーい!

もー!
順番! 順番ッ!



ゆ 唯ちゃんの
パイズリ
すこくいいよお!

あずにゃんのお口
小さくておちんちん
全部入らないね

あずにゃんの
小さな手が 手があ



唯ちゃん
ザーメンでるよお
受け止めて!!!

あずにゃんの
口まんこに
出る 出るーッ

どうしよう…私
精液2回飲んだ
だけなのに…

イキそうになってる…

さて、お次は
あずにやんの
いきまくりの敏感
おまんこも可愛がって
あげてえ♪

やあつ
恥ずかしいですうう

おまんこ

それにイッてるのは
おちんちんだけで…

あずにやんおまんこ
凄くしまってるよおお

本物のおちんちん
挿れられちゃった

私もおまんこにも
おちんちんたくさん
挿れてよおお

唯ちゃんおまんこも
たくさん可愛がつて
あげるからねえ

あずにゃん
こっち向いて

ちゅっちゅ

あずにゃん

あずにゃん

あずにゃん

あんにん

はーやーくうー
おちんちん
欲しいよおー

あんにん

あんにん



あつ
機械が壊れ
ちやつた…

機械



もう…
おしまい…
ですか…?

せ…んば…い



おいしい紅茶を飲むには
もつとたくさんさんのミルク
搾らなきゃ…ね♡

まだだよ
あずにゃん



ほら
あずにゃん

本物のおちんちん
挿れられながら
びゅーびゅーって
ユップに注いで

が
が

唯
あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん



あずにゃん
か
か
か
あずにゃん
あずにゃん

あずにゃん

あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん

あずにゃん

あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん

あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん
あずにゃん



新入生の皆さん
軽音部特製の
紅茶は如何ですか？



先輩達が卒業してからというもの、軽音部の部室にはいつもの空気がかき消されるようになったかと思っただけれど……そんなことも無く卒業しても先輩達は遊びに来てくれる。

私は、部室のドアを開けると唯先輩が部室の机に座って、部室で溺愛しているギターのギ―太の手入れをしていた。

一人になるのは怖かったけれど、何とかやっていけるそんな気がして、相変わらずの先輩達だけとそれでいいと感じていた。

「唯先輩！卒業しても部室にいるんですね。やっぱり部室が恋しいんですか？」

「あ、あずにゃん。うん、そうだね。やっぱりここは私の好きな場所なんだなあって思っただね」

「まったく……唯先輩は……」

「でも……あともう一つ理由を付けたら……」

机に座っていた唯先輩が私の前に近づき顔を撫でながら微笑みかけながら話しかけてきた。

「学校に来たらさ、もれなく……こんなに可愛いあずにゃんにも会えるしね」

不意打ちだった、どうしようもない顔が熱い……そんな唯先輩言わないで。本当言ったら凄く淋しかった。

「唯先輩……顔が近いです……そんな事言われたら私……」

唯先輩は天然ボケなのかよくわからないけれど、そんな事言われたら動揺しても仕方ないと考えるのが普通だと思う。

「ギ―太も部室で練習してえらって言うてるし、こらやってチューニングしたら……あれえらチューナー忘れてきたのかなあ」

唯先輩は鞆の中をゴソゴソしながら、困惑しているのを見ているとどうしても放っておけなくなる……

これが唯先輩のいい所って言うてもいいんだけど、たまに年上なのを忘れてしまう。

「はあ……練習するのにチューナー忘れたんですか？確か……部室に予備のがあったはずなんで一緒に取りに行きましょう」

「うわあ、ありがとうございます……あずにゃん」

私達は倉庫に移動し倉庫にある箱を手にして探し始めた。

以前に私が倉庫に訪れた時に一度見たことがあったのをふと思いだした。

「確か……ここらへんだっただけだなあ……」

「そういうのは、皆で倉庫の片付けもしたなあ、なんか思い出しちやっただよ」

思い出に振り返りながらも倉庫を見渡す、そうすると奥のほうで怪しそうな箱を見つけた。私はそこへ移動して箱を開けようとした時だった。

唯先輩は違うものを見つけたらしく何か企んでいるかのよう

うに自慢げに見せてきた。

「あずにゃん、なんか凄いのみつけたよ」

「それ、何ですか？ちょっと変なの持ってたないで下さい」

「いいじゃん、いいじゃん、これなんだと思っ」

黒っぽいビンに入った液体の薬品で名前を見ると『物質X』と書いてある。怪しい……怪しすぎる。

「物質X……」

「なんか凄いやね！すごいギターが上手になるとか深宇宙みたいな感じがするよお」

「深宇宙とか……じゃなくて、どう考えても怪しいですって」

「そっかなあ、ちよつとベタバタするなあ……おっ」と

「唯先輩っ！零れる……ほれるう」

「きやああ」

唯先輩の持っていた液体の蓋が少し開いていたらしく、唯先輩が少し身体を揺らした時に私のスカートに着いてしまい、丁度、股の所についたせいでスカート濡れてしまったので替えの服も無い。どうしようか……

「………もういいです、自分でします」

「あちゃ……本当にゴメン……先生に言っ替えの服借りてくる」

血相を変えた先輩は私に誤りながらいろんな事をしてく

れるけれど、起ったことは仕方が無い。しかし…この液体はどこから…それに効能は何なのか知る由も無い。

何かあったらどうしようと思っていた矢先だった。

何か股の所がムズムズする。何というか…：身体に違和感がある。生えていると言ったほうが正しいそんな感覚。

「ハ、ハ、ハ、置いておくから、職員室行ってくるね」

「唯先輩…！ま…待ってください…！」

「ふえ？何？何かあったの？」

「…こんな大丈夫です…でも…さっきの液体で…こんなになってしまったとかそういうの関係無いです」

「めっちゃ関係と思うんだけどなあ…」

目の前にいる唯先輩に恥ずかしながらムズムズする股を隠しつつ、自分の身体のクリトリスが膨張してチンポになったことを告白した。

「さっきのでなっただんだよね…そういうえば…この前も…そういうのでなっただような…」

私の目の前で何か思いついたように先輩はニヤニヤしながら私に話しかけてきた。

「そうだからさっきの液体…って」

「唯先輩！何するんですか？」

唯先輩は例の液体である物質Xを手にとりて股に搾りこみ始めた、そんな事したら私と一緒にしてしまうのになんてどうしてわざわざするのか皆自分からなかった。

「ふふふん、あずにゃん見てたらさ、私もそんなふうになりたくなって思ってたね」

「も…戻らなくなったらどうするんですか！もう少し考えて下さい」

「大丈夫だって、さっき効能の所見たんだ。そしたらさ、ふたなりになったら射精すれば戻りますって書いてたの見たんだ」

射精すれば戻る…という事は唯先輩の前で私はどうしたらいいんだ。尋めにも程がある。それに先輩の前で弄ったりするなんて恥ずかしい。

「射精…ということとは…」

唯先輩はその後、ゆっくり私に近づいて部室の倉庫で二人で見えないように顔に軽くキスをした。それから笑って私に話しかけて、私の手をふたなりになった唯先輩の股間に当てた。

「あずにゃんとエッチしよって事かな？私もこんなことになってるし」

「え…えーと…唯先輩…」

「どうせだったら、学校だし…ちょっと面白い所でエッチするのもアリかなあ…うんうん楽しそう」

※

私がオドオドしている間に唯先輩は私を学校でも人気があ

る場所へ連れてきた。連れられている時は私のアソコがふたなりになっている事を気付かれたらどうしようとか考えてしまう考えたらずる程、私のアソコがムズムズしているのがわかるのが恥ずかしい。そして、連れられた場所は講堂の裏だった。今日は他の生徒も集まっていてこんな所でするなんて先輩どうかしてると思う。

見られたらどうするつもりなの。私がふたなりになって辱められているのを見られたら…。こんな変な姿見られたらきつと晒しものにされる。

「ゆ…唯先輩！こんな所でなんて無理です…」

「そうかなあ…楽しそうだと思うんだけど…」

「楽しそうだなんて呑気な事言わないで下さい…私はこんな…こんな」

目尻が熱くなり泣きたしそうになった。私がふたなりになっているのに唯先輩は呑気に遊んでいて、どうしたらいいかわからない。

「…あ、ゴメン…泣かせるつもりは無かったんだ…嫌なら止めるよ…」

「でも、あずにゃんがちよっと恥ずかしくなる所見たかったんだ」

唯先輩は私の顔を見つめてちよっと赤くなりながら言った。

唯先輩はストレートに言うてくるから私も恥ずかしくなる。

「唯先輩…え…エッチ…」

「エッチっそんなあゝ私そんなにエッチだったんだ」

「そうじゃなくて……その……」でエッチして……いい……です」

「ほ……本当？ やったあゝあずにゃん、キスしよ」

「唯先輩……私……せんば……」

木陰になっていてちよつと死角になるような場所に隠れてキスをした。最初は柔らかくて優しいキスでそれから何回かキスをしていく内に舌を絡めるキスに変わっていく。吐息が近い……唯先輩の舌が私の舌に絡みついてきて舌と舌が擦れる度に何度も重ねたくなる。

「……ふあつ……ゆい……せんばあい……」

「はあつはあつ……キスってこんな気持ち良かったんだね……」

「わ……私も……そ……そんな事ありません……」

恥ずかしくてつい強がってしまった。そんな事知られたらわけ分からなくなるくらい壊れそうって言えない。考えたら考える程、顔が熱くなってしまつた。

「どーして？ こんなにも顔が赤くなっているのに……」

「赤くなんかなくてません……たく唯先輩は……」

「素直になつたらいいのになあー私は知ってるよ、あずにゃんのそういつのが可愛いつてよ」

さっきまで考えていた事が水に流されたように唯先輩の言葉が胸に響いていた。唯先輩が私の事をこんなに知っているなんて思っていなかったからだ。私は身体の力が一気に無くなってしまい。その場で座りこんでしまった。

「あ……あずにゃん……大丈夫？」

「だ……大丈夫です……なんか私が思っていたより唯先輩が私の事知っていたから……ちよつと気が緩んでしまつて」

「そっか……それなら良かった……」

「唯先輩……続きをして……ほしいです……」

それから、もう一度キスをしながら唯先輩は私の胸に触れてくる。先程のキスで気持ちよくなったせいか触れられる前から乳首が勃起していた為か制服の布が擦れるだけで感じてしまつた。

「あは……あずにゃん……もうこんなになつて……ちよつと触つているだけでも分かるもん……それに触れる度にあずにゃんの声が可愛くなるから」

「……ゆい……せんばいつ……」

「もつとしたくなつちやうー！ よーしブラウスの上から舐めちやあつと」

「……やだあ……せんばいつ！ わたし可愛くないから……そんなの……汚れちやうし……」

段々、ブラウスが唯先輩の唾液で透明になっていく……濡れていく度に唯先輩の舌先がよく分かつてきて、二つの事が重なつて恥ずかしくなつてくる。

「もう汚れてるからいいじゃん……それより……あずにゃんのおっぱい凄いキレイだよほら……ピンク色で可愛いっ」

「だから……可愛くなんか……」

唯先輩は自分のブラウスをはだけさせてブラジャーを半分脱いで自分の乳首を私の乳首に擦り当ててきた。

「見ていたら擦りたくなつたんだ。ほら私の乳首もこんなに勃起してる……凄いよね……」

「はあはあ……ん……っ」

唯先輩の乳首も勃起していて私と同じのが擦れて……身体の下から湧き上がってくる感覚になってくる。何だろう変な感じ。下半身の膨張したチンポが揺れ動くのが止まらない。パンツは膨れ上がったチンポのせいでほぼ脱げていて履いていない状態に近くなつていた。

「き……気持ちいいね……あずにゃん……」

「あずにゃんのチンポ……さっきから揺れ動いていてなんだか苦しそう……どうして欲しい？」

「先輩ってそんなキャラでしたっけ？ ど……どういつ事って言われても……」

「気持ち良くなりたいたい？ それとも放つておこつかなあ」

意地悪そうに唯先輩は笑いながら言う。どうしたらいいってそんなの決まつてるのに唯先輩の考えている意味がわからない。どういえばいい……。とにかくこの膨れ上がったチンポをどうにかして欲しくて溜まらなない。

「……チンポを……どうにかしてほしい……です……」

「どうにかする……か……じゃあこんなのとかどう？」

張したチンポを乳房で挟み込んで擦ってくる。柔らかい感触と自分が出していた愛液で滑りが良く感度が益々上がっている。

「ふあああん…せ…せんばあい…擦れて…」

「あずにゃんのチンポ凄いい汁垂れてて私の胸ベタベタだよー凄いいね、汁だけでこんなに濡らしちゃうなんて…」

「はあああん…そんなに言っちゃ…」

女の子の胸ってこんなに気持ち良かったんだ。柔らかくてスベスベしてて気持ちがいい…こんなに気持ちよくなってしまったらおかしくなってしまう。

「普通に擦るだけじゃ…面白く無いから…今度はあずにゃんのチンポを舐めてあげるね…」

唯先輩の乳房からはみ出ている亀頭の部分から舌先の感覚を感じる。凄い…一人でオナニーした時みたいにクリトリスを刺激している感覚に陥る。ダメだ…もう我慢出来ない。

「はああ…はああん…もっとしてえ…もっとして…」この感じが好きなの…」

「はあつはああん…あずにゃんの顔凄いい色っぽくて可愛い…」

「唯先輩…逝っちゃう…逝っちゃう…あああああつ…」

「出してえ…私の口に…トトロ口の精液を出してえ…」

！絶頂に耐えられなくなった私は唯先輩の顔と口に溢れんばかりの精液をぶっ掛けてしまった。精液の量が多かったみたいで唯先輩の顔が精液まみれになってしまっくらい掛けてしまった。

「ふあああん…ごめんなさい…ごめんなさい…気持ちよくなって唯先輩の顔にかけちゃって…」

「いいんだよお…こんなに気持ち良かったんだよね…ほら…こっうやって吸い上げたらもっとうてきまつ…」

逝ったばかりの痙攣したチンポを唯先輩は口に含んだ。そうすると痙攣したチンポが再び元気になっていく。射精したら戻るところか治りそうにも無い。まだ、逝ききれて無かった分が後から後から出てきて唯先輩の口内を汚す。本当に「ごめんなさい…」だけとまだ出してしまいたい程に気持ちいい。と、唯先輩は私と対面するように座らせてチンポを擦りながら言った。

「気持ちよくなったみたいで嬉しい…私のチンポがこんなに硬くなってて苦しいの…だから今度は私が気持ちよくなりたい…」

「ゆい…せんばい…」

「私、あずにゃんのお尻の穴に挿れたいんだ…挿れてほしいってさっきからヒクヒクしてるんだもん…」

「ひやああああつ…！…そこは…」

「静かにして…ここは外だよ…それにもうすぐ皆が外に来るかも知れない…静かにしなきゃ…バシちゃう…」

「だって、そこに挿れるのは…」

「大丈夫…我慢出来ないよ…ソレっ…！」

ヌルヌルした粘液が私のお尻の穴へと誘うのが分かり、その直

後に中へとチンポが挿入されていくのがよく分かる。「マン」をオナニーする時とはまた違う感覚でお腹の中をかき乱すような圧迫、不思議な感覚になる。

「ああああつ…！…ああああ…ゆい…ゆいせんばい…」

「あずにゃんはエッチだねえ…お尻の中までトトロ口になって…マン」も変な汁たくさん出てるし…」

唯先輩のチンポがお尻の穴で動いているだけでも凄く気持ちよくて昇天しそうなのにそれなのに私の「マン」に唯先輩は手で愛撫をしてくる。

「あずにゃんの「マン」温かい…アツアツだねえねえ…もっとうてきまつよね…」

「はああ…ゆい…ゆいせんばい？？何する気なんですか…」

「えへっ、あんまりにも温かいから手を挿れちゃいたくなって…トトロ口になって美味しそう…」

私の「マン」を愛撫していた手首が段々私の「マン」の奥へと挿入されていく、お尻の穴に挿れられたチンポでも圧迫されているのに、「マン」にまっ挿れられるなんて思ってもいなかった。

「腫（なか）で広がっていく…あずにゃんの腫（なか）気持ちいい…マン」に手を入れられてこんなにいやらしい事を外でしてるんだよ…」

「うっ……んなんのなるなんて…嫌じゃないけど…」

外でエッチしている事を改めて意識した時、二人の鼓動が高くなりチンポを先程よりも熱くさせる。唯先輩のチンポがお

アートガキ。

最後まで読んで頂きありがとうございました!!

今回のけいおん本は如何だったでしょうか?

前回 滯×あず+律で、今回は唯×あず+その他。

初めての展開(女の子以外の登場人物が出てくる)に挑戦してみましたー!

らぶらぶもいいけどたまにはこういうのもイイネ!と思って頂けたら嬉しいです

今回も商業と同人の締め切りがほぼ重なっていて大変でした～

無事に出せてなによりです(´・ω・`)ホッ

ほぼ寝ずに頑張って作ったこの本を大切にさせて頂けると嬉しいな…

ちなみにあずにゃんに使われてた器具は実際にあります～

興味のある方はググってくださいww

そんな人はいないか(´ω`)

次の本もお付き合い頂けたら嬉しい限りです♪

それでは、またお会い出来る日まで～

2010・12月 雪路時愛 (ゆきじしあ)

<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>



そんなふたなりで大丈夫か? 大丈夫だ、問題ない。

さーて、ゆいあず本ということで書かさせてもらいましたが、

前回のフタメタモルの続きものに近い内容になっています。

最近ラブラブな内容を書く事が好きなので楽しく、そしてネットリな感じで書いて楽しかったです。

来年はまさかの映画化という事でまた彼女達が大暴れするのを見れるのは嬉しいものですね～:)

へんげい! というネーミングと内容で出てくる物質については元ネタのあの方のモチーフですw (またかい)

そんな感じですが、また機会があれば書きたいなと思っています。

もしよかったらもう一度読んでみて下さい♪ではでは～

2010年 12月31日大晦日 味燐ふーか (@深宇宙でキャバ)

http://blog.livedoor.jp/sora_san3/



奥付

■ 77X7EIL2 ■

発行日：2010.12.31

イベント：ComicMarket79

発行：んーちゃかむーむー

著者：雪路時愛 & 味燐ふーか

HP：<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>

Mail：n_cyak_mm@yahoo.co.jp

印刷所：大陽出版様

18歳未満閲覧禁止

本作品の登場人物は全て20歳以上です。

画像の転載、データ化、web等でのデータの共有はご容赦ください。26

